

連作交響詩「わが祖国」第二曲「モルダウ」にみるスウェーデンロマン主義
(とスウェーデン民謡“*Ach du sköna Värmland*”)の影響関係について

スウェーデン語専攻 伊地知俊紀

目次

1. はじめにー研究の意義と方法
2. 思想史
 - 2.1. ロマン主義；スウェーデンにおけるロマン主義
 - 2.1.1. ロマン主義の動き
 - 2.1.2. ドイツ新ロマン主義
 - 2.1.3. 新時代を切り開いてゆくものたち
 - 2.1.4. ゴート主義の復活
 - 2.1.5. 新人文主義者テグニェール
 - 2.2. スウェーデンにおける国民的・民族的ロマン主義
 - 2.2.1. 耽美的ロマン主義
 - 2.2.2. スウェーデンの自然
 - 2.2.3. オスカルモラル
 - 2.3. スウェーデン民謡とロマン主義
 - 2.4. 当時のチェコにおける音楽ナショナリズム;作品の背景について
 - 2.4.1. チェコの歴史の概要
 - 2.4.2. チェコにおける音楽ナショナリズム
3. スメタナ・ベドルジフ(*Bedřich Smetana*)について
 - 3.1. スウェーデン渡航以前の民族主義への傾倒
 - 3.2. スウェーデン時代
 - 3.3. 帰国後
4. 類似する2曲について
 - 4.2. 連作交響詩「我が祖国」第2曲「モルダウ」について
 - 4.2. スウェーデン民謡について
5. 音楽理論的分析
 - 5.1. 上記2曲間での比較分析
 - 5.2. 他の類似メロディを持つ楽曲

6. スメタナとスウェーデン民謡の関係性について
ースメタナがスウェーデンにいた時代についての資料の分析ー
7. おわりに

要約

本論文では、ボヘミア出身の作曲家であるスメタナによって作曲された連作交響詩『我が祖国』の第2曲「モルダウ」のなかに、スウェーデン民謡のメロディの影響を見て取れるという記事について、懐疑的な立場から考察を進めた。特に歴史的な背景の考察に重点を置き、どのようにその曲が成立したのか、当時のスウェーデンとチェコにおいてはどのような文化思潮が主流であったのか、またその文化思潮がスメタナにどのような影響を与えたのかについて、イデオロギー的な側面から資料を読み解いた。また文学ゼミの卒業論文であることを考慮し、音楽だけではなく、文学におけるロマン主義にも焦点を当てている。

第1章ではスウェーデンにおけるロマン主義の興隆について述べていく。スウェーデンのロマン主義にはドイツロマン主義の影響が色濃く見られる。哲学においてもドイツ観念論の影響をうけているが、カントやフィヒテというより、シェリングによって形成された核となる部分をベンジャミン・フイエルなどがスウェーデンへと持ち帰っている。

この際この思想について進歩派と保守派の間に論争が生じたが、1821年に進歩派の代表であったアッテルボムは保守派と和解することとなる。また、このスウェーデンのロマン主義において精神面における特徴としてゴート人主義が挙げられる。1811年にストックホルムでゴート人起源説協会が設立され、彼らの活動が拡大していくにしたがって、19世紀前半にこの考え方が普及した。この協会には、詩人のアルムクビストや歴史家のアンデシュ・フリクセルなどをはじめ、各分野の代表者が召集されていた。この協会の主な目的は古代北欧時代の伝統や文化を大切にし、守っていくことであり、古代アイスランドの詩や中世吟遊詩人らの詩が彼らの研究対象となった。またのちに建てられるスカンセンはこのゴート人起源説協会のメンバーの息子によって建てられたことから、このゴート人起源説はスウェーデンにおける民族ロマン主義に繋がっていると言える。

ニューヒューマニズム哲学においてもドイツの影響を強く受けていたが、スウェーデンにおいて特徴的であったこととして、このゴート人主義(あるいはスウェーデン普遍主義ともいう)が普及していたために、国家という視点が欠けていたことが挙げられる。例えばエサイアス・テグニェールは、ゴート人主義とニューヒューマニズムを結びつけ、雑誌を通してゴート人起源説をモチーフにした詩を多く発表していた。代表的な出版物として、14世紀のアイスランドの物語を踏まえて書かれた *frithiofs saga* が挙げられる。

次に19世紀後半のスウェーデンロマン主義とその拡大と発展について論じ、自国及び自国の歴史と芸術を称え、初期のものを評価するというこの思想の特

徴を指摘した。この時期には耽美主義的ロマン主義という考え方も支持され、スウェーデンの自然、とりわけもみの木の森や夏の緑豊かな広い草原、オーロラや北欧の光、それぞれの州ごとの特徴やそこに暮らす人々が好んで描かれた。当時の音楽の中にも民族的ロマン主義の要素を見いだすことができ、例えばロマン主義音楽家であるヴィルヘルム・ステーンハンマルは北欧の自然環境に重点を置いたオペラを創作した。一方で、民族意識に目覚めていない国民のために戦争を望む過激な思想が登場したのもこのころである。

また 1885 年にスウェーデン観光協会(Svenska Turistförening)が設立されており、これもナショナリズムの一つの形だと認識されているという。独自の地理や自然を賞賛する文化の登場と、鉄道の開通によって旅がしやすくなったことが要因の一つであると考えられている。さらに 19 世紀後半にスウェーデンでは国家のアイデンティティの確立を希求する気運が高まり、人々は北の山岳地帯と手付かずの自然および野生動物の存在にスウェーデンらしさを見出していった。

加えて 19 世紀後半、スウェーデンではオスカルモラルというものが存在した。これはオスカル 2 世(在位 1872-1907)の時期のモラルのことを指している。彼は保守的で文化的に社会に影響を与えようと試みた。政治面で大きな成果を残すことはなかったが、文化的には科学の発展や北極遠征を奨励するなど大きく貢献している。しかし彼はストリンドバリを社会における不安扇動者と見なす発言もしており、その矛盾から二重モラルと呼ばれることもある。

次章で民謡と文学との関係について触れ、スウェーデンでは文学のロマン主義が音楽に先行し、かつ互いに密接に関わり合い相互に影響を与えたことを確認した。これに対し当時のチェコでは、ハプスブルク帝国からの分離と近代国家の成立を目指す運動の政治ナショナリズムに先行して、文学や音楽を中心とする文化ナショナリズムが起きていた。スメタナはこのナショナリズムの渦中を生き、強くチェコへの愛国心を抱いていたことがその行動や思想から窺える。また国民音楽に関して、スメタナは民謡から国民音楽を創造する方法を批判し、現代の作曲技法を用いて民族芸術を創り上げていくべきだと主張した。

その後この 2 つの曲の成り立ちと音楽理論について触れ、二つの音楽が全く同じでないことを示し、またスメタナ自身の示したこの音楽についての表題からもスウェーデンのイメージが存在しないと結論付けた。